

關於並存他動詞

王 淑琴

政治大學日本語文學系 副教授

摘要

日語中有些自動詞有複數對應的他動詞（以下稱此複數對應的他動詞為並存他動詞）。本稿不以動詞的形態與其語意之間有一定的對應關係為前提，只以語意為基準分類並存他動詞。亦即，①是否表相同語意②語意是否重疊③與自動詞的語意對應關係作為分類基準。本稿的分類以語意為基準，因此也可將不具特定形態的他動詞列入探討範圍，記述方法較具系統性。此外，本稿的記述以現代書面語料庫的用例為本，較能反映現在的使用狀況。

若將本稿與王（2013）的考察結果合併來看，並存的自動詞與他動詞都有(1)語意的變化(2)語意的分化(3)一方的動詞逐漸消失的現象。並存的自他動詞違反日語自他動詞一對一對應的原則，而且也不符合語言的經濟性，因此必然會發生語意的變化，分化及語彙的消失等現象。

關鍵詞：並存他動詞，語料庫，語意變化，語意分化，語彙消失

受理日期：2013.08.31

通過日期：2013.10.26

About the Coexistent Transitive Verbs

Wang Shu-chin

Associate Professor, Department of Japanese language and culture of
Chengchi University

Abstract

There are coexistent transitive verbs in Japanese. In this paper, the coexistent transitive verbs were broken down into patterns by their meaning alone rather than the correspondence relation between the meaning and the affix. That is (a)denoting the same meaning or not (b)the overlap of meaning (c)correspondence relation of the meaning of intransitive verbs. This classification bases on meaning, so the coexistent transitive verbs that do not have the particular affix can also be classified. And the analysis is based on the examples of the corpus of contemporary writing so it is helpful to know the contemporary usage.

Combining the results of this paper with Wang(2013), both the coexistent transitive and coexistent intransitive verbs have (1) the change of meaning (2) the differentiation of meaning (3) the obsolescence of word. These verbs are against one to one relation principle of transitive and intransitive verbs in Japanese, and do not follow the economy of language either, so the phenomena mentioned above would inevitably occur.

Keyword: coexistent transitive verb, corpus, change of meaning,
differentiation of meaning, obsolescence of word

併存する他動詞について

王 淑琴

政治大学日本語文学系 准教授

要旨

日本語には併存する他動詞、つまり、一つの自動詞に複数の他動詞が対応するというものがある。本稿は動詞の形態とその意味との間に一定の対応関係があるという前提に立たず、併存する他動詞をその意味のみで分類する。つまり、①同じ意味を表すか否か、②意味が重なる部分があるか、③自動詞との意味的な対応関係という三つの基準によって分類し記述した。本稿の分類は意味に基くので、特定の形態を持たない併存する他動詞も記述の枠に入れることができ、より体系的な記述ができる。また、本稿は現代書き言葉コーパスの用例に基く記述なので、より現在の使用状況を反映することができる。

王（2013）との考察結果を合わせて考えてみると、併存する自動詞と他動詞はともに(1)意味が変化する、(2)意味が分化する、(3)一方の動詞が廃れるという現象が見られることが明らかとなった。併存する自他動詞は一対一という日本語の自他対応の原則に反し、また、言語の経済性にも合わないため、意味の変化、分化、単語の消滅という現象が必然的に起きると考えられる。

キーワード：併存他動詞、コーパス、意味の変化、意味の分化、語彙の消失

併存する他動詞について

王 淑琴

政治大学日本語文学系 准教授

1. はじめに

日本語では一つの自動詞に複数の他動詞が対応するという現象が見られる。例えば、自動詞「繋がる」には「繋ぐ」と「繋げる」という二つの対応する他動詞がある。本稿はそのような他動詞を併存する他動詞と呼び、それらを記述することを目的とする。

併存する他動詞について、類義語として個別的に記述するものがほとんどで¹、体系的に記述したのは須賀（1980）のみである。須賀（1980）は併存する自他動詞を形態的な対応関係によって分類し分析する。併存する他動詞について、例えば、-u、-eru の併存する他動詞（つなぐ・つなげる／くるむ・くるめる／ふくむ・ふくめる）の場合、「-u の形のものが動作主の動作を意味し、-eru の形のものが対象の状態を変える意味を担う」(p. 37)と指摘している。しかし、この一般化はすべての例を説明することができない。例えば、須賀は以下の例を挙げ、「動作主の包む様な動作を言う場合にはクルメルよりもクルムが使われる」、「逆にクルメルが使われるのは、複数のものを一緒にする場合」であり、これは「動作主の動作を必ずしも必要とするものではなく、対象をその様な状態にすることである」と述べている。

- (1) a. いろいろな菓子を紙でクルム。
b. いろいろな菓子を紙でクルメル。
- (2) a. 私はネッカチーフで頭をクルンダ。
b. ×私はネッカチーフで頭をクルメタ。

¹併存する他動詞を類義語として取り上げるものには、柴田他（1976）（「とく・とかす」を取り上げた）と田他（1998）（「とく・とかす」「ぬく・ぬかす」「どける・どかす」「つなぐ・つなげる」「もやす・もす」を取り上げた）と富田（2002）（「つなぐ・つなげる」を考察した）がある。

(3) a. ×料金は全てクルンデ千円だった。

b. 料金は全てクルメテ千円だった。 (須賀 1980: 36)

しかし、「くるむ・くるめる」には上記の意味の違いがあるからといって、直ちに「-u の形のものが動作主の動作を意味し、-eru の形のものが対象の状態を変える意味を担う」(p. 37) という結論を導くことができない。(1)では「くるむ・くるめる」はともに対象「菓子」の状態を変えたので、一方が「動作主の動作」、一方が「対象の状態を変える意味を担う」ということが言えない。また、「対象の状態を変える」という記述は漠然としており、どのような場合状態を変えたと言えるのかが不明である。須賀の説に従うと、(1b)の「紙で菓子を包める」という動作は状態を変えるが、(2a)の「ネッカチーフで頭を包む」という動作は状態を変えないということになる。しかし、目的語の「菓子」も「頭」もある程度の変化が起きると考えられる。

Matsumoto (2000) は LCS では「-e」他動詞が CONTROL、「-as/-os」他動詞が CAUSE という関数で表されるという影山 (1996) の説を検討し、反例を挙げ他動詞の形態とその意味との間の対応関係は絶対的ではないと主張している。影山は、「-as/-os」他動詞は主語を個体 (動作主) に限定しないという点で特徴的であるのに対し、「-e」他動詞は主語を個体 (動作主) に特定すると指摘している。例えば、(5)では「-e」他動詞「並べる」「建てる」は動作主の主語を取ることができるが、「電車の振動」「彼の持ち家願望」のような原因を表す主語を取ることができない。

(4)a. {子供／日照り} が花を枯らした。

b. {子供／突風} がブランコを揺らした。

(5)a. {子供／*電車の振動} が石を並べた。

b. {大工さん／*彼の持ち家願望} が家を建てた。

(影山 1996: 196)

これに対し、Matsumoto (2000) は影山が挙げた例はただの偶然であり、その区別は動詞自体の意味から来たもので形態素とは関係が

ないと指摘している。例えば、「めぐらす」「とばす」「出す」「尖らす」「焦がす」「へこます」「垂らす」「負かす」「漏らす」「縮らす」「下ろす」「満たす」などは「-as/-os」他動詞であるが、原因を表す主語を取ることができない（(6)を参照）。また、「苦しめる」「慰める」は「-e」他動詞であるが、原因を表す主語を取ることができる（(7)を参照）。いずれも影山の指摘に反している。

(6)a. *Kare ga soo sita koto ga soko ni hee o megur-asi-ta.

（*彼がそうしたことがそこに塀をめぐらした。）

b. *Kare ga soo sita koto ga hikooki o tobasita.

（*彼がそうしたことが飛行機を飛ばした。）

(7) Kare ga soo suru koto ga kanozyo o kurusim-e-ta.

（彼がそうすることが彼女を苦しめた。）

（Matsumoto2000: 180）

このように、動詞の形態とその意味との間の対応関係が絶対的ではない。したがって、本稿は動詞の形態とその意味との間に一定の対応関係があるという前提に立たず、併存する他動詞をその意味のみで分類する。つまり、①同じ意味を表すか否か、②意味が重なる部分があるか、③自動詞との意味的な対応関係という三つの基準によって分類し記述する。

2. 研究対象と方法

日本語では一つの自動詞に複数の他動詞が対応するのは一般的ではない。ここでは併存する他動詞がどのように使われているかを調べるため、須賀(1980)がリストした 22 組の併存する他動詞のうち、辞書に載っておらずコーパスでも用例が見付からない 1 組の他動詞²と、併存するとは認められない 4 組の他動詞³を取り除いて、計 17

² 「ほとばす」と「ほとぼす」である。

³ 「紛らす」と「紛らわす」は意味が類似する他動詞であるが、それらの他動詞に対応する自動詞がないため、併存する他動詞とは認められない。また、須賀は「アケル・アカス」をリストしているが、両者の表記が違って（「開ける（空ける）・明かす」）意味もずれているため、研究対象から除外する。また、次の例が示すように、「剥ぐ」と「剥がす」はそれぞれ「剥がれる」と「剥げる」と

組の併存する他動詞の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)で現れる回数を表 1 にまとめた。

本稿は、コーパス検索アプリケーション『中納言』を使い「語彙素」か「語彙素読み」で検索する。表 1 の数字は誤解析を取り除き、次の原則にしたがって処理したものである。つまり、動詞の意味が残るものを用例として数えるが、そうでないものを除外する。この原則にしたがって次の作業をした。

- ① 動詞の連用形が名詞として使われるものを用例として数える。
- ② 派生語・複合語の場合は用例として数える。⁴
- ③ 「語彙素（読み）」による検索では複合動詞も含まれるため、複合動詞の場合は次のように処理する。

(a) 「統語論的複合動詞」⁵の前項動詞として使われるもの（例えば、「繋ぎなおす」「含みきる」「生かし続ける」「伸ばし始める」「切り忘れる」など、下線は本稿が扱う併存する他動詞、以下同様）は補文構造（[[目的語を V1] のを V2]）であり前項動詞が本動詞の意味を受け継ぐため、用例として数える。

(b) 「語彙的複合動詞」の場合、併存する他動詞の意味が受け継がれたもの（例えば、「繋げ合わせる」「含みこむ」「もぎ取る」「蒸しあげる」など）は用例として数えるが、そうではないものは取り除く（例えば、「煮えきらない」）。

(c) 「統語論的複合動詞」の後項動詞として使われるものはアスペ

いう対応する自動詞があり、「浮かべる」と「浮かす」はそれぞれ「浮かぶ」と「浮く」という対応する自動詞があり、併存する他動詞（つまり、一つの自動詞に二つ以上の他動詞が対応する）とは言えないため、研究対象から外した。

(i) a. 木の皮を剥ぐ／木の皮が剥がれる

b. 塗装を剥がす／塗装が剥げる

(ii) a. 船を水に浮かべる／船が水に浮かぶ

b. 宿泊費を浮かす／宿泊費が浮く

⁴例えば、次の例が挙げられる（下線は本稿が扱う併存他動詞である）。「生け方」「繋ぎっぱなし」「生かしにくい」「もぎごろ」「蒸らし具合」「切りばえ」「切りばさみ」「蒸しタオル」。そのような例の場合は、動詞の意味がそのまま受け継がれると考えられる。

⁵日本語の複合動詞は「統語論的複合動詞」と「語彙論的複合動詞」に分けられることは広く指摘されている（森山 1988、影山 1993 参照）。ここでは、姫野（1999）がリストした 30 語（影山 1993 がリストした 27 語に 3 語を加えた）の「統語論的複合動詞」を基準にした。

クト化した（例えば、「生き抜く」「覆いつくす」「使いきる」）
ため、用例を取り除く。

④慣用表現で使われるもの（例えば、「口を切る」「正面切る」「至れりつくせり」）は用例として数える。

表 1 BCCWJ における併存する他動詞の使用回数

包む ⁶	261	包める	5
繋ぐ	3621	繋げる	898
含む	18923	含める	8948
生ける ⁷	246	生かす ⁸	5124
退ける	97	退かす	54
伸べる ⁹	36	伸ばす ¹⁰	6164
切る	14854	切らす	275
溶く	265	溶かす ¹¹	1018
抜く	4455	抜かす	388
もぐ	90	もぎる	5
濁す	226	濁らす	0
蒸す	514	蒸らす	129
尽くす	2305	尽かす	113
燃す	37	燃やす	1004
跳ねかえす	196	跳ねかす	3
寝せる	1 ¹²	寝かす	202
無くす ¹³	2450	無くなす	2

⁶ 「包む」の場合は「くるむ」「つつむ」という二つの読み方があるため、ここでは「語彙素読み」で「くるむ」の造語を抽出した。

⁷ 「語彙素」による検索では「活ける」「埋ける」と表記されるものも含まれる。

⁸ 「語彙素」による検索では「活かす」と表記されるものも含まれる。

⁹ 「語彙素」による検索では「延べる」「展べる」と表記されるものも含まれる。

¹⁰ 「語彙素」による検索では「延ばす」と表記されるものも含まれる。

¹¹ 「語彙素」による検索では「解かす」「融かす」と表記されるものも含まれる。

¹² 次の例のみである。また、「寝せる」の文語形「寝す」は 9 例あるが、ここでは計算に入れなかった。

(i) 「にぶいのねえ、風見は。そのために今夜あなたに来てもらったのよ。手はいくらでもあるじゃないの。酔わせるとか、くすりを服ませるとか、とにかく一緒に寝せればいいのよ。」
(『新幹線殺人事件』)

表 1 から併存する他動詞の一方がほとんど使われないものがあることが分かる。また、実際にその意味を分析すると一方の他動詞の意味が自動詞と対応していないものや、重なる部分があるが意味が微妙に異なるものがあり、併存する他動詞にはさまざまな類型が存在することが分かる。王（2013）は併存する自動詞をその意味によって類型化している。その分類は意味に基づくものなので、併存する他動詞も同じように分類できると考えられる。以下は併存する他動詞を王（2013）の原則にしたがって分類したものである（後の説明のため、ここでは各下位分類に番号をつけた。また、()の中の数字は表 1 に示された使用回数である）。

(I) 異なる形態で異なる意味を表すもの

(A) 意味が一部重なるもの—①

「包む(261)・包める(5)」 「繋ぐ(3621)・繋げる(898)」

「伸べる(36)・伸ばす(6164)」

(B) 意味が重なっていないもの

(i) 一方の他動詞が自動詞と対応しないもの—②

「含む(18923)・含める(8948)」

「生ける(246)・活かす(5124)」

「溶く(265)・溶かす(1018)」 「もぐ(90)・もぎる(5)」

(ii) 両方の他動詞がそれぞれ自動詞と対応し相補的分布をなすもの—③

「切る(14854)・切らす(275)」 「抜く(4455)・抜かす(388)」

「蒸す(514)・蒸らす(129)」 「尽くす(2305)・尽かす(117)」

(II) 異なる形態で同じ意味を表すもの

(A) 一方の他動詞がほとんど使われないもの—④

「濁る(226)・濁らす(0)」 「跳ねかえす(196)・跳ねかす(3)」

「寝せる(1)・寝かす(202)」 「無くす(2450)・無くなす(2)」

(B) 両方の他動詞が同じ意味を表すもの—⑤

¹³ 「語彙素」による検索では「失くす」「喪くす」と表記されるものも含まれる。

「退ける(97)・退かす(54)」「燃す(37)・燃やす(1004)」

まず、併存する他動詞を①の基準「同じ意味を表すか」によって、(Ⅰ)「異なる形態で異なる意味を表すもの」と(Ⅱ)「異なる形態で同じ意味を表すもの」に分ける。前者はさらに②の基準「意味が重なる部分があるか」によって「意味が一部重なるもの」と「意味が重なっていないもの」に分ける。「意味が重なっていないもの」はさらに③の基準「自動詞との意味的な対応関係」によって、「一方の他動詞が自動詞と対応しないもの」と「両方の他動詞がそれぞれ自動詞と対応し相補的分布をなすもの」に分ける。一方、「異なる形態で同じ意味を表すもの」は同じ意味を表すため、その使用状況によって「一方の他動詞がほとんど使われないもの」と「両方の他動詞が同じ意味を表すもの」に分ける。

併存する他動詞と自動詞を同じ方法で分類することによって、その共通点も明らかになってくる。それについて第4節で述べる。

3. 併存する他動詞の分類

この節では併存する他動詞の各下位分類を見る。3-1節では「異なる形態で異なる意味を表すもの」、3-2節では「異なる形態で同じ意味を表すもの」を見る。

3-1 異なる形態で異なる意味を表すもの

以下、3-1-1節では「意味が一部重なるもの」、3-1-2節では「意味が重なっていないもの」を見る。

3-1-1 意味が一部重なるもの

意味が一部重なるものには「包む・包める」「つなぐ・つなげる」「伸べる・伸ばす」がある。まず「包む・包める」を見る。「包む・包める」はともに「巻き包む」の意味があるため、次の例が示すように、「くるめる」を「くるむ」に言い換えられる。

(8) 牛肉のスープ、ハムを卵で焼きくるめた(=くるんだ)料理。

(『堀内海軍大佐の生涯』)

しかし、「包める」は文語なので現代語ではあまり使われない。特にくだけた文章では「包む」を「包める」に言い換えにくい。¹⁴

(9) ☆ちゃきん絞り。。。かぼちゃや さつまいも ポテトサラダなどをラップでくるんで／(?くるめて)茶巾しぼりにします。

(Yahoo!ブログ)

コーパスでは「包める」の例が5例しかなく、そのうち「巻き包む」の意味で使われる用例は3例しかないのに対し、「包む」の261例はすべてその意味で使われる。また、次の例が示すように、「包める」は「ひっくるめる」の意味を持つが、「包む」はその意味を持っていない。

(10) (略)、ひいては漁獲資源の配分など問題点もあるから、いま簡単に日韓だけが別の次元だというふうなことではなしに、くるめた(*くるんだ) 関連性の中でいま第三次の海洋法会議が行われて、百五十カ国の国々がいろいろと一生懸命している。
(国会議事録)

このように、「包む」と「包める」はともに「巻き包む」という意味を持っているが、「包める」は文語であり、また、「ひっくるめる」という意味を持つ点では「包む」と異なる。

次に「つなぐ・つなげる」を見る。「つなぐ・つなげる」はともに「離れているもの、切れているものをひと続きにする」という意味を持つため、多くの場合は互いに言い換えることができる。

(11) おすすめは、雑誌付録CDROMなどから体験版をインストールした後、インターネットにつないで (=つなげて)、オンラインで契約をします。
(Yahoo!知恵袋)

(12) 八人部屋のベッドに寝転がり、自前のパソコンにヘッドホンをつなげて (=つないで) 再生する。
(中日新聞)

¹⁴本稿で使われる記号について、*は非文法的、?は不自然、#は文法的であるが意図した意味ではない、という意味を表す。また、その適格性の判断について筆者がコーパスやウェブでの用例に基き判断したものをネイティブにチェックしてもらったものである。

「つなぐ・つなげる」を類義表現として捉え、その違いを指摘したものには須賀（1980）、天沼（1991）、田他（1998）、富田（2002）がある。富田（2002）はその他の説を検討し、「つなぐ」と「つなげる」の基本的意味を次のように記述している。

(A)「つなぐ」の基本的意味

切れたり離れたりしていない方が望ましいもの、自然なもの、
または、本来は切れたり離れたりしていないものが、切れたり
離れたりしている場合、それらをひと続きにすることである。

(B)「つなげる」の基本的意味

本来は別の二つのものを（無理に）ひと続きにする

（富田 2002： 117）

例えば、(13)(14)はひと続きになっていることが自然であるか、
望ましい出来事であるため、「つなぐ」が使われるとしている。

(13)a. 切れたひもをつなぐ

b. *切れたひもをつなげる

(14)a. 飼い犬をつなぐ

b. *飼い犬をつなげる

（富田 2002： 118）

このように、「つなぐ」と「つなげる」は意味が重なる部分があり
互いに言い換えられる場合があるが、上記のような意味の違いも見
られる。

最後に「伸べる（延べる）・伸ばす（延ばす）」を見る（以下平仮
名で表記する）。「のべる」は書き言葉的な表現¹⁵であるが、「さしだ
す、さしのべる」の意味では「のばす」との共通性が見られ、互い
に言い換えられる。

(15)おまえの行状と恩知らずには愛想がつき果てた。これを最後
に、救いの手を伸べて(=伸ばして)はやるが、それはおまえ
の母親を思えばこそだ。 （『てのひらの涙』）

¹⁵KOTONOHA ではジャンルを「Yahoo 知恵袋!」と「Yahoo ブログ」に限定して語
彙素で検索すると、「伸ばす」が 799 例、「伸べる」が 0 例という結果からも「伸
べる」は話し言葉的な表現では使わないことが分かる。

「のぼす」には数多くの意味があるが「のべる」はそれらの意味を持っていない。例えば、(16)が示すように「のべる」は「曲がったものをまっすぐにする」「長びくようにする」の意味を持っていない。一方、(17)が示すように「のべる」は「敷く」の意味を持っているが（「床／布団をのべる」）、「のぼす」はその意味を持っていない。

(16) a. 曲がった釘をのぼす(*のべる)。

b. 会期をのぼす(*のべる)。

(17) 寝間へは、弟の孝志が、心配して付き添ってきた。すでに、
布団が延べて(*延ばして)ある。（『ラバウル烈風空戦録』）

このように「のぼす」「のべる」は意味が一部重なりながらも、それぞれが独自の意味を持ち互いに言い換えられない部分がある。意味が完全に同じではないため、両者の併存が可能なのである。

3-1-2 意味が重なっていないもの

3-1-2-1 節では「一方の他動詞が自動詞と対応しないもの」、3-1-2-2 節では「両方の他動詞がそれぞれ自動詞と対応し相補的分布をなすもの」を見る。

3-1-2-1 一方の他動詞が自動詞と対応しないもの

この下位分類には「含む・含める」「生ける・生かす」「溶く・溶かす」「もぐ・もぎる」がある。まず「含む・含める」を見る。「含む」は「包含する・帯びる」「口でくわえる」の意味があるが、「含める」はそれらの意味を持っていない。

(18) 地下資源は、特に有用な元素を多く含む(*含める) 鉱物が濃集したところから採取される。（『高等学校 理科総合 A』）

(19) 砂糖にミルクをいれ、少し冷めたコーヒーを口に含んだ(*含めた)。（『それぞれの断崖』）

これに対し、「含める」は「A が B を C に含める」の構造であり、「ある範囲の中に入れる」の意味を表す。(20)では「わたしをその団体の中に入れて四人」という意味を表し、「含める」を「含む」に

言い換えられない。

(20) 今回の航海では、女性はわたしをふくめて (*ふくんで) ちょうど四人。
(『深海底 7500 メートルの世界へ』)

このように「含む」と「含める」は意味も構造もが違い、互いに言い換えられないことが分かる。一方、自動詞「含まる」¹⁶との意味的な対応について、「含まる」はコーパスでは5例しかなく「～が含まれる」と同じ意味で使われる。(21)では「衣服に色々な要求が含まる(=含まれる)」の対応する他動詞表現は「衣服は色々な要求を含む」であるため、「含まる」の対応する他動詞は「含む」と考えられる。

(21) ところがシナ服から日本服になって来ると、衣服というものは単なる被服に非ずして、これに生理的、衛生的、宗教的、色々な要求が含まって、その複雑なるものを純化して来ています。
(『この国を思う』)

このように、「含む」と「含める」は意味が重なっておらず、「含める」は自動詞「含まる」と意味が対応していないことが分かる。

次に、「生ける(活ける／埋ける)・生かす(活かす)」を見る(以下平仮名で表記する)。「いける」は「花や枝などを花器や瓶に挿す」の意味を表すが、「いかす」はその意味を持っていない。

(22) わたしはお客さんに満足してもらえるようにいつも店に季節の花を活ける (*活かす) のですが、お花の粹な演出となると、これがなかなかむずかしいのです。

(『お茶屋遊びを知っといやすか』)

一方、「いかす」は「死なないようにする」「活用する」の意味を持っているが、「いける」はそれらの意味を持っていない。

(23) マスコミは、長寿社会とか老人福祉とか、口あたりのいいこ

¹⁶須賀(1980: 37)では「含む・含める」には対応する自動詞がないと述べているが、辞書には「含まる」という見出し語がリストされ、また、コーパスでも「含まる」の用例が見付かり、さらに、意味的にも形態的にも「含む・含める」と対応しているため、ここでは「含む・含める」の対応する自動詞として扱った。

とばかりいってるけど、現実には病気の老人をマカロニみたいな管だらけにして生かして（*生けて）いるだけじゃないか。

（『やっぱ私は嫌われる』）

（24）設計は江島さんに、そして工事はしっかりした工務店に任せ、これまでの苦い経験を生かし（*生け）、更に理想の住みかに近づけたいのだという。（『「住みか」のヒント』）

自動詞「いきる」との意味的な対応について、（25）～（27）が示すように「死なないようにする」「活用する」の意味を表す「いかす」は自動詞「いきる」と対応しているが、「花をいける」という動作は対応する自動詞表現がない。¹⁷

（25） a. 活きエサとしての小魚をいかす。

b. 活きエサとしての小魚がいきている。

（26） a. 今までの経験をいかす。

b. 今までの経験がいきている。

（27） a. 花をいける。

b. #花がいきている。（花が枯れていない状態を指す）

このように、「いける・いかす」は意味が重なっておらず、「いける」は自動詞「いきる」と意味が対応していないことが分かる。

次に、「溶く・溶かす（解かす・融かす）」（以下平仮名で表記する）を見る。「とく」と「とかす」の違いについて、「とく」は「水の量が少なく、もとの物質がゆるめられどろどろになった状態にするときに言う」という意味を表すのに対し、「とける」は「何かを液体の中に入れる意味のときはすっかり液の中に混ざって、もとの物質が分からなくなるような状態を表す」という意味を表す¹⁸。また、「と

¹⁷どのような他動詞が対応する自動詞を持たないかについて、佐藤（2005：176）は「動作様態の特定性」を有する場合は絶対他動詞（対応する自動詞を持たない他動詞）になると指摘している。例えば、「（太郎が壁にペンキを）塗る」は、壁に着色する方法が指定されている（動作主が対象の表面と平行に自分の身体部分を動かす）ため、対応する自動詞がないとしている。「花をいける」の場合は花を飾る方法が限定されている（例えばただ花を容器に入れるだけでは「いける」とは言えないなど）ので、対応する自動詞がないのである。

¹⁸goo 類語辞書『使い方の分かる 類語例解辞典 新装版』（小学館）による。

く」は「熱を加えるときには言わない」としている¹⁹。以上の説明から両者は意味が重なる部分がないことが分かる。したがって、次の例が示すように両者は互いに言い換えることができない。²⁰

(28) 卵を溶いて (*溶かして) 少しずつ加えながら混ぜ、卵が混ざったら、レモンの皮をすりおろしながら加えて混ぜる。

(『お菓子作り入門』)

(29) 火が通ったら、とろけるスライスチーズをのせ、余熱でチーズを溶かす (*溶く)。(Yahoo!知恵袋)

一方、自動詞「溶ける」との意味的な対応について、次の例から分かるように「溶く」は自動詞「溶ける」と意味が対応していない。

(30) a. 卵を溶いた。

b. #卵が溶けた。(卵が見えなくなる状態を指す)

(31) a. チーズを溶かした。

b. チーズが溶けた。

以上の説明から分かるように、「とく・とかす」は意味が重なっておらず、「とく」は自動詞「溶ける」と意味が対応していないことが分かる。²¹

最後に「もぐ・もぎる」を見る。辞書²²では「もぐ」と「もぎる」はともに「ねじり取る、ちぎり取る」の意味を表すと記述している。しかし、コーパスでは「もぐ」はその目的語に果物や体の一部を表す名詞が来るのに対し、「もぎる」は次の例が示すようにその目的語に「チケット、切符」が来る。両者は意味が重なる部分がないため

¹⁹同注 18。

²⁰「絵の具をとく」「絵の具をとかす」はどちらも言えるが、前者は「絵の具を水の中に入れどろどろの状態にする」の意味を表すが、後者は次の例が示すように「絵の具を水の中に入れ分からなくなる状態にする」という意味を表す。
(i) どうしたんだろうと入ってみると、洗濯をするために下着をほうりこんでいた洗面台の水が黒の絵の具を溶かしたような色になっている。

(『はいはい旅団ベトナムへ行く』)

²¹注 17 で述べたように、「動作様態の特定性」を有する他動詞は対応する自動詞を持たない。「溶く」の場合は、柴田 (1976) が指摘したように手段として手・指 (及びその延長) を用いるので、動作の方法が指定される動詞である。そのため、「溶く」は対応する自動詞がないのである。

²² デジタル大辞泉。

互いに言い換えることができない。

- (32) わたしは苦勞して少しだけよじのぼり、ゼリーが二、三瓶作れるだけの林檎をもいだ (*もげた)。

(『イングランド田園讃歌』)

- (33) ピンスポットを当てているのは、さっき入場切符をもぎって (*もいで) くれた男の子だった。

(『レッドモンキー・モノログ』)

自動詞「もげる」との意味的な対応について、次の例が示すように「もぐ」は目的語が体の一部である場合は「もげる」と意味が対応しているが、目的語が果物の場合は「もげる」と意味が対応していないことが分かる。一方、「もぎる」は自動詞用法がないため自動詞「もげる」と意味が対応していない。

- (34) a. 左腕をもいだ。

b. 左腕がもげた。

- (35) a. りんごをもいだ。

b. ?りんごがもげた。

- (36) a. チケットをもぎった。

b. *チケットがもげた。(c. f. チケットがもぎられた)

つまり、「りんごをもぐ」「チケットをもぎる」は対応する自動詞用法がないのである。²³この意味では「もぎる」は「もげる」と意味が対応しておらず、「もぐ」は「もげる」と意味が一部対応していると言える。このように、「もぐ・もぎる」は意味が重なっておらず、「もぎる」は自動詞「もげる」と意味が対応していないことが分かる。

この節で見た併存する他動詞の一方は、自動詞と意味が対応していないため、おそらく別の他動詞という意識が強いと考えられる。例えば「いける・いかす」の場合、自動詞「いきる」と対応する他動詞は「いかす」であり、おそらく「いける」は別の他動詞である

²³注 17 で述べたように、対応する自動詞を持つか否かは、他動詞が「動作様態の特定性」を有する否かによる。

という意識が強い。「とく・とかす」「もぐ・もぎる」についても同じことが言える。つまり、「とける・とかす」「もげる・もぐ」は自他対応をなしていて、「とく」「もぎる」は別の他動詞という意識が強い。3-1-1 で見た「意味が一部重なるもの」は、意味が重なる部分があるが、一方或いは両方の他動詞に独自の意味があるため、二つの他動詞が併存することが可能になる。この節で見た「一方の他動詞が自動詞と対応しないもの」は、一方の他動詞が自動詞と対応していないため、二つの他動詞が併存することが可能になる。つまり、一つの自動詞に複数の他動詞が対応する必要がないため、一方の他動詞が意味変化を起こすことによって、二つの他動詞が併存することが可能になると考えられる。

3-1-2-2 両方の他動詞がそれぞれ自動詞と対応し相補的分布をなすもの

このタイプに属するものには「切る・切らす」「抜く・抜かす」「蒸す・蒸らす」「尽くす・尽かす」がある。まず、「切る・切らす」を見る。「切る」は多くの意味を持っているのに対し、「切らす」は「切れた状態にする」「使い切る」の意味しかない。「切らす」の「切れた状態にする」という意味について、コーパスでは「息／しびれを切らす」の用法しかなく慣用化したため「切る」に言い換えられない。また、「使い切る」の意味を表す場合も「切る」に言い換えられない。

(37) 私が先に待っていたが、約束の時間を十五分ほど過ぎてやっと夫が息を切らして (*切って) 走ってきた。

(『私は金正日の「踊り子」だった』)

(38) ルートが学校から帰ってきたあとしばらくして、サラダ油を切らして (*切って) いるのに気づき、私は買物に出た。

(『博士の愛した数式』)

自動詞との意味的な対応について、次の例が示すように、「切る」

と「切らす」はそれぞれ「切れる」と意味が対応している²⁴。

(39) a. 息／サラダ油 を切らした。

b. 息／サラダ油 が切れた。

(40) a. 風の糸／電話／縁 を切った。

b. 風の糸／電話／縁 が切れた。

このように、「切る」と「切らす」は意味が重なっておらず、また、それぞれ自動詞「切れる」と意味が対応していることが分かる。

次に「抜く・抜かす」を見る。「抜く」は多くの意味を持っているが、「抜かす」は表す意味が少なく、また、「腰を抜かす」「うつつを抜かす」のように用法が慣用化したものもある。慣用化したものは「抜く」に言い換えられず、また、「言う、しゃべる」の意味を表す場合も「抜く」に言い換えられない。

(41) 三騎の奇襲を目撃した旅人らは、生首を六つも見せられており、全員が腰を抜かして（*抜いて）いた。

（『三代将軍の密命』）

(42) それがこの前、日舞の人かなんかが九十一歳で死んだとき、もうちょっと生きて欲しかったなんてぬかす（*ぬく）やつがいるんだから笑ったね。 （『やっぱり私は嫌われる』）

また、「抜く」と「抜かす」はともに「省く」の意味があるが、「抜かす」は「意図的ではない（うっかり）」という意味があるので、「抜く」に言い換えられない。

(43) 例えば調査票では、何番で何と答えた方は何ページの何番に行って下さい、というようにしているが、調査票を見慣れていない人は間違えたり、抜かして（*抜いて）しまったりすることが多々ある。 （『朝日総研レポート AIR 21』）

²⁴ 次の例が示すように「切る」の意味はすべて自動詞「切れる」の意味と対応しているのではない。注 17 で述べたように、動作の方法が指定された他動詞は対応する自動詞がない。下記の例において「人参を切る」場合も「茹で汁を切る」場合も特定の道具や方法が使われると考えられるため、対応する自動詞表現が成立しない。

(i) a. 人参／茹で汁 を切った。

b. *人参／茹で汁 が切れた。

自動詞「抜ける」との意味的な対応について、次の例が示すように、「抜く」と「抜かす」はそれぞれ「抜ける」と意味が対応している。

(44) a. 歯／空気 を抜いた。

b. 歯／空気 が抜けた。

(45) a. 腰を 抜かした。

b. 腰が 抜けた。

このように、「抜く」と「抜かす」は意味が重なっておらず、また、それぞれ自動詞「抜ける」と意味が対応していることが分かる。

次に「蒸す・蒸らす」の意味を見る。「蒸す」は「湯気を当てて熱を通す」、「蒸らす」は「炊き上がった御飯や料理がよく蒸れるようにする」の意味を表す。両者はまったく意味が異なるため、言い換えると意味が変わってしまう。

(46) 鰻は背開きして竹串を打ち、炭火で白焼きしてから蒸して（#蒸らして）2、3回、タレをつけながら焼く。

（『クロワッサン』）

(47) 炊き上がったご飯に枝豆を入れてふたをし、十分蒸らして（#蒸して）全体を混ぜる。 （『和食のシンプルレシピ』）

自動詞「蒸れる」との意味的な対応について、両者とも「蒸れる」と意味が対応している。「蒸す」は「熱を通して湯気を当てる」ことであるが、「蒸らす」は余熱などによって「蒸れる」の状態にする意味を表す。したがって、「蒸らす」は「蒸す」の次の段階であると考えられる。次の例が示すように「蒸す」と「蒸らす」の対応する自動詞はいずれも「蒸れる」である。

(48) a. 野菜を蒸して混ぜる。

b. 野菜を蒸らして混ぜる。

c. 野菜が蒸れたら混ぜる。

このように、「蒸す」と「蒸らす」は意味が重なっておらず、また、それぞれ自動詞「蒸れる」と意味が対応していることが分かる。

最後に「尽くす」「尽かす」を見る。「尽かす」は「すっかり出し

てなくす」の意味を表し「愛想を尽かす」で使われその用法が慣用化している。そのため、「尽くす」に言い換えられない。一方、「尽くす」は複数の意味を持っているが、「尽かす」の用法が慣用化したため、「尽かす」に言い換えられない。

(49) 義姉のみどりはじり貧の電器店の主人である兄に愛想をつかし(*つくし)、別の男に走ったのだ。 (『父からの手紙』)

(50) (略)、あるいは当局に対する請願・陳情をくりかえし、手段をつくし(*つかし) 権利の回復につとめた。

(『地租改正』)

自動詞「尽きる」との意味的な対応について、次の例が示すように「尽くす」と「尽かす」の意味はそれぞれ「尽きる」の意味と対応している。

(51) a. 力を尽くす

b. 力が尽きる

(52) a. 愛想を尽かす

b. 愛想が尽きる

このように、「尽くす」と「尽かす」は意味が重なっておらず、また、それぞれ自動詞「尽きる」と意味が対応していることが分かる。

この小節では「切る・切らす」「抜く・抜かす」「蒸す・蒸らす」「尽くす・尽かす」を見た。それらの併存する他動詞は意味が重なっておらず互いに言い換えることができない。また、自動詞との意味的な対応という観点から見ると、両者は相補的な分布をなしていると言える。したがって、この小節で見た「両方の他動詞がそれぞれ自動詞と対応し相補的な分布をなすもの」は意味が分化し二つの他動詞で一つの他動詞の働きををすると言える。

前に述べたように、「意味が一部重なるもの」と「一方の他動詞が自動詞と対応しないもの」は、一方の他動詞が意味変化を起こすことによって、二つの他動詞が併存することが可能になると考えられる。このように、一つの自動詞に複数の他動詞が対応する場合、意味がまったく同じである他動詞が存在する必要がないため、一方の

他動詞が意味が変化する、或いは意味が分化し二つの他動詞で一つの他動詞の働きをするということが見られる。

以上は異なる形態で異なる意味を表す併存する他動詞を見た。3-2節では異なる形態で同じ意味意味を表す併存する他動詞を見る。

3-2 異なる形態で同じ意味を表すもの

以下、3-2-1では「一方の他動詞がほとんど使われないもの」、3-2-2では「両方の他動詞が同じ意味を表すもの」を見る。

3-2-1 一方の他動詞がほとんど使われないもの

このタイプに属するものには「濁る・濁らす」「跳ねかえす・跳ねかす」「寝せる・寝かす」「無くす・無くなす」があり、一方の用例数がなく、或いは数例に留まることが見られる。まず「濁る・濁らす」について、「濁らす」は見出し語として辞書に載っているがコーパスでは用例が見付からなかった。「跳ねかえす・跳ねかす」について、「跳ねかえす」は複数の意味を持っているが「跳ねかす」は「水・泥などをとばし散らす」の意味しかなく、また、この意味は「跳ねかえす」にもある。コーパスでは「跳ねかす」は3例しかなく、いずれも次の例が示すように「跳ねかえす」に言い換えられる。

(53) 時々自動車が水溜りの水を思い切ってはねかして（＝はねかえして）飛んで行く。 (『近きより』)

「寝せる・寝かす」について、コーパスでは「寝せる」は次の1例しかなく「寝かす」と同じ意味で使われる。

(54) 「スキャンダルには相手が要ります。冬本が乗らないことには」「にぶいのねえ、風見は。そのために今夜あなたに来てもらったのよ。手はいくらでもあるじゃないの。酔わせるとか、くすりを服ませるとか、とにかく一緒に寝せれば（＝寝かせば）いいのよ。 (『新幹線殺人事件 長編推理小説』)

「無くす・無くなす」について、「無くなす」は2例しかなく次の例が示すように「無くす」と同じ意味を表す。

(55) ゆんべ、日ぐれごろ、わなを見にあのへんへきたんだろうな

…そこで、わしらの洞穴んなかで、なくなした (=なくした)

くつを見つけたってわけだ。 (『野に出た小人たち』)

このタイプの併存する他動詞は、使用回数が少ない一方がもう一方に言い換えられるという意味では、3-1 節で見た「意味が一部重なるもの」と類似している。しかし、両者は意味や使用回数において違いが見られる。「一方の自動詞がほとんど使われないもの」は、一方の他動詞は使用回数が極端に少なく意味も単義的である。例えば、「跳ねかえす」には「跳ねさせる」の意味（「水／泥を跳ねかえす」）のほか、「克服する」（「劣勢／不振を跳ねかえす」）や「受付けないでかえす」（「要求を跳ねかえす」）の意味があるが、「跳ねかす」は用例数が少なく、その目的語も「水」や「泥」に限られ、用法がかなり限定されている。

これに対し、「意味が一部重なるもの」は一方の用例数が少ないということが見られるが、その意味は多義的で一方の他動詞にない意味を持っている。例えば、「伸べる (36)・伸ばす (6164)」の場合、「伸べる」の使用回数は「伸ばす」のと比べて低いが、「跳ねかす」「寝せる」のように使用回数が極端に少ないものではない。また、「伸べる」は「たたんであるものなどを広げる」（布団を伸べる）、「積極的にさしだす」（手／首を伸べる）などの意味があるが、「たたんであるものなどを広げる」という用法は「伸ばす」にはない。つまり、「一方の自動詞がほとんど使われないもの」と「意味が一部重なるもの」の差は併存する他動詞が独自の意味を持っているか否かということにある。前者の場合、一方の意味は単義的で完全にもう一方の動詞の意味に内包される。後者の場合、両方の他動詞は重なってはいるがそれぞれ独自の意味を持っている。この違いは両者の使用回数にも反映される。つまり、「意味が一部重なるもの」はそれぞれが独自の意味を持っているため、使用回数が極端に少ないということはないのである。

3-2-2 両方の他動詞が同じ意味を表すもの

両方の他動詞が同じ意味を表すものには「退ける・退かす」「燃す・

燃やす」がある。まず、「退ける・退かす」を見る。「退ける」も「退かす」も「物や人を他の場所へ移して場所をあける」の意味しかなく、次の例が示すように互いに言い換えられる。

(56) 救急車の医療技士たちは、食事の客のテーブルをどけて
(=どかして)、彼女を運び出さなければなりませんでした。

(『人気ワインコラムニストはなぜ生まれたか?』)

(57) 足を踏みつけたまま、握手をもとめる人に言えることは、早くその足をどかして (=どけて) くれという要求から出発するものです。

(『可能性としての「在日」』)

「燃す・燃やす」について、「燃す」は「焚く」の意味しかなく「燃える」に言い換えられる。

(58) 官舎を宿舎として泊まるのに室内で柴を燃して (=燃やして)、煙にむせびながら、畠山所長以下、医官の方々が歓迎して下さった。

(『鍼の道』)

しかし、「燃す」は「焚く」の意味しかないためそれ以外の場合は「燃す」に言い換えられない。また、「燃す」は古い表現なので、「燃やす」に言い換えると不自然である。

(59) ライバルとして対抗意識を燃やし (*燃し)、切磋琢磨で互いの力を高めてきた。

(『3時間で自慢できる空想科学サッカー読本』)

(60) 水加減をし、薪に火をつけたのだが、やっぱり薪など燃やした (?燃した) ことのない若い主婦達は、ただ奥へ奥へと薪を重ねて押し込み、くすぶっている。

(『プロの書き技』)

このように、「燃す」の意味は「燃やす」に含まれるため、「燃す」はだんだん使われなくなり 3-2-1 で見た「一方の他動詞がほとんど使われないもの」になることが予測される。

3-3 -asu 他動詞と使役動詞-aseru との関係

表1に示されたように、併存する他動詞は-asuで終わるものが多い。五段動詞には-asu(「読ます」、「行かす」など)という使役形も

あるため、ここでは-asu と使役動詞-aseru（五段動詞の場合のみ）との関連が問題になる。結論から言うと、本稿で扱った-asu で終わる動詞は、動詞の使役形ではなく他動詞である（以下、V-asu、V-aseru で表す）。

表 1 にリストされた V-asu 動詞について、対応する V-u 動詞がない場合は、V-u 動詞の使役形ではないと判断できる。例えば、「生かす」「蒸らす」の場合、「生く」「蒸る」がないため、動詞の使役形ではなく他動詞であると判断できる。これに対し、対応する V-u 動詞を持つ場合は、V-asu 動詞は使役形か他動詞かが問題になる。対応する V-u 動詞（自他動詞を問わず）を持つ V-asu 動詞は以下のものがある。

（一）V-u 他動詞を持つ場合

溶く（他）－溶かす－溶かせる

抜く（他）－抜かす－抜かせる

切る（他）－切らす－切らせる

（二）V-u 自動詞を持つ場合

尽く（自）－尽かす－尽かせる

濁る（自）－濁らす－濁らせる

退く（自）－退かす－退かせる

上記の動詞について、もし V-asu 動詞は V-u 自他動詞の使役形なら、V-aseru 動詞と同じ意味を表すはずである。しかし、実際、V-aseru 動詞は V-u 動詞の使役形と V-asu 動詞の可能形を表し、V-asu 動詞と同じ意味を表すのではない。例えば、(61)の「溶かせる」は「溶かす」の可能形であり、(62)の「溶かせる」は「溶く」の使役形である。したがって、「溶かす」は他動詞であり、「溶かせる」とは異なる動詞である。

- (61) チーズフォンデュのおいしい作り方と具でおすすめがあればおしえてください。まず、素材としてはエメンタールチーズとグリュールチーズを同量混ぜて使用します（これはご存知？）が、最初にチーズを溶かせる（＝溶かすことができる）

容器を温めてニンニクをすり込んでおきます。

(Yahoo!知恵袋)

(62)(料理番組で先生がゲストに料理を指示をすることに対して)
せ、せんせえ～(;´Д`) 卵を溶かせただけで、後は全部あ
なたがやるんですかいっ

(http://blog.livedoor.jp/kt_1209_miju/archives/2008-08.html?p=4)

しかし、再帰用法の場合は、「Nを V-asu」と「V-aseru」は同じ意味を表すことがある。例えば、(63)では「息を切らせる」は「息を切らす」の可能形ではなく、「息を切らす」と同じ意味を表す。²⁵

(63)息を切らせ (=切らし)ながら大きな稲妻形を描いて登りき
ると、突如として巨大な展望がひらけた。

(『山とスキーとジャングルと』)

このように、本稿が扱った V-asu 動詞は V-u 五段動詞の使役形ではなく、他動詞であることが分かる。但し、目的語が動作主の体の一部を表す再帰用法の場合は、「Nを V-asu」と「V-aseru」は同じ意味を表すことがある。

3-4 まとめ

3 節では併存する他動詞の下位分類を見た。一方の他動詞が意味変化を起こすことによって、二つの他動詞が併存することが可能になる、また、二つの他動詞で一つの他動詞の働きをするということ

²⁵使役動詞を使う「腰を抜かせる」「愛想を尽かせる」(他動詞表現はそれぞれ「腰を抜かす」「愛想を尽かす」)はコーパスにはなかったが、ウェブでは多数の用例が見付かった。周辺の用例ではあるが V-aseru が使われることがある。
(i)柳沢が興味深そうに近寄ると、その白い石は「我輩は新井白石である。このまま漬物石として一生を費やすのは我ながら勿体無い」と言い柳沢の腰を抜かせた。(アンサイクロペディア―新井白石の項目)
(ii)ベテラン・新人共に、民主党に愛想を尽かせ、先行きの不安を感じ取り、
選択を迷う気持ちは理解される。

(<http://katsuya.weblogs.jp/blog/2013/09/post-bf08.html>)

なぜ V-asu と V-aseru の両方が使われるのかについては使役動詞の認定や類推の問題とも関わり、ここでは深く立入らないことにする。

が見られる。3-2-1 では他動詞が併存する場合、一方の他動詞がほとんど使われなくなったことを見た。このように、二つの他動詞が併存する場合、(1)意味が変化する、(2)意味が分化する、(3)一方の他動詞が廃れるという現象が見られることが分かる。

4. 併存する自動詞との共通点

この節では王（2013）の考察結果と合わせて併存する自動詞と他動詞の共通点を明らかにする。

本稿は王(2013)と同じ基準で併存する他動詞を分類し考察した。つまり、①同じ意味を表すか否か、②意味が重なる部分があるか、③自動詞との意味的な対応関係という三つの基準によって併存する他動詞を分類する。この分類は意味を基準にしたものであり、この分類により併存する自動詞も他動詞も(1)意味が変化する、(2)意味が分化する、(3)一方の動詞が廃れるという現象が見られることが分かった。日本語では自他動詞の対応は一対一であり、一つの自動詞に二つの他動詞が対応する、或いは一つの他動詞に二つの自動詞が対応するのはこの原則に反し、また、言語の経済性にも合わない。意味がまったく同じである自動詞、或いは他動詞が存在する必要がないため、上記の現象が起きると考えられる。

次に、併存する自他動詞は一方の動詞の用法が慣用化するという共通点が見られる。例えば、併存する自動詞の場合、「足る」は「足りる」と同じ意味を表すが、次の例が示すように、「足る」は肯定形の述語用法を持っておらず、また、「数量表現＋足らず」で複合語になって「～だけだ、～に過ぎない」の意味を表す場合や、「言葉足らず」などの慣用的な表現の場合は「足りる」に言い換えられない。

(64) a. 一日五時間で睡眠が {*足る／足りる}。

b. 早起きで睡眠が {足らない／足りない}。

(65) a. 選挙まで二ヶ月足らずだ。

b. *選挙まで二ヶ月足りずだ。

(66) a. 言葉足らずな説明で申し訳ありません。

b. *言葉足りずな説明で申し訳ありません。(王 2013: 103)

また、前に述べたように、併存する他動詞「尽くす」「尽かす」の場合、「尽かす」は「愛想を尽かす」で使われその用法が慣用化したため、「尽くす」に言い換えることができない((67) = (49))。

(67) 義姉のみどりはじり貧の電器店の主人である兄に愛想をつかし(*つくし)、別の男に走ったのだ。(『父からの手紙』)

一方の動詞の用法が慣用化することによって、同じ意味を表しても共存することが可能になると考えられる。「足る」「足りる」の場合、上記のような環境では「足る」しか使われないため「足りる」に取って代わられることはない。「尽くす」「尽かす」の場合も同様、「尽かす」は「愛想を尽かす」という用法が慣用化しその場合においては「尽くす」が使われないため、両者はともに「出しきる」という意味を持っていたとしても共存することが可能になるのである。

また、一方の動詞の用法が慣用化することによって、一対一という自他の対応がより明確になるということも考えられる。例えば、「愛想を尽かす」という用法が慣用化しているが、その自動詞表現は「愛想が尽きる」という関係が成立する。この場合、(66)が示すように、「尽くす」「尽きる」、「愛想を尽かす」「愛想が尽きる」はそれぞれ自他対応をなしているため、「尽くす」「尽きる」の自他対応がより明確になると考えられる。「足る・足りる」の場合も「足る」の使用制限によって「足りる」と「足す」の自他対応がより明確になると考えられる。

(68) 「尽くす」(他) — 「尽きる」(自)

「愛想を尽かす」(他) — 「愛想が尽きる」(自)

併存する自他動詞のうち、「一方の自(他)動詞が他(自)動詞と対応しない」(例えば、「休む(4162)・休まる(140)」、「生ける(246)・生かす(5124)」)というタイプがあるが、このタイプは一方が他(自)動詞の意味と対応していないため、自他対応が明確である。

(69) 「休む」 (別の自動詞)

「休まる」(自) — 「休める」(他)

(70) 「いける」(別の他動詞)

「いかす」(他) — 「いきる」(自)

このように、一方の動詞の用法が慣用化した併存自他動詞は、一方の自他動詞と対応しない併存自他動詞と同様の現象が見られることが分かる。つまり、意味用法の慣習化や意味変化は一対一という自他の対応をより明確にする働きがあると考えられる。

5. おわりに

併存する他動詞の先行研究について、類義語として個別的に記述するものがほとんどでその全体像が明らかにされていない。併存する他動詞をその形態と意味との間の関係から考察するものがある

(須賀 1980) が、冒頭で述べたように形態と意味との間の関係は絶対的ではない。本稿は併存する他動詞の形態と意味との間に絶対的な対応関係がないということを前提に、併存する他動詞をその意味のみで類型化した。意味による分類なので特定の形態を持たない併存する他動詞も記述の枠に入れることができ、より体系的な記述ができる。また、本稿は現代書き言葉コーパスの用例に基く記述なので、須賀(1980)と比べてより現在の使用状況を反映することができる。

王(2013)との考察結果を合わせて考えてみると、併存する自動詞と他動詞はともに(1)意味が変化する、(2)意味が分化する、(3)一方の動詞が廃れるという現象が見られることが分かった。前に述べたように、併存する自他動詞は一対一という日本語の自他対応の原則に反し、また、言語の経済性にも合わないため、意味の変化、分化、単語の消滅という現象が必然的に起きると考えられる。一つの自他動詞に複数の対応が存在することは日本語及び言語の一般的な原則に反するため、このことを考慮して併存する自他動詞を記述すべきである。

参考文献

- 天沼寧他（1991）『言葉に関する問答集』文化庁
- 王淑琴（2013）「併存する自動詞の類型について」『政大日本研究』
pp. 87-115
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎（1996）『動詞意味論』くろしお出版
- 柴田武・長嶋 善郎・国広 哲弥・山田 進（1976）『ことばの意味—
辞書に書いてないこと』平凡社
- 佐藤琢三（2005）『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書店
- 須賀一好（1980）「併存する自動詞・他動詞の意味」『国語学』120
pp. 31-41
- 田 忠魁・金 相順・泉原 省二（1998）『類義語使い分け辞典—日本
語類似表現のニュアンスの違いを例証する』研究社
- 富田久仁子（2002）「併存する他動詞—『つなぐ』と『つなげる』の
意味」『岐阜大学留学生センター紀要』 pp. 111-122
- 姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- Matsumoto, Yo. “Causative alternation in English and Japanese: Review
article on *Dooshi imiron* by Taro Kageyama,” *English Linguistics* 17.
2000. 160-192.

付記：本稿は『複数對應的自他動詞之研究』（行政院国家科学委員会
NSC100-2410-H-004-184-MY2）の研究成果の一部である。また、
査読の先生方から有益なコメントをいただき、記して心から
御礼を申し上げたい。